

令和 7 年度
保護林モニタリング調査
報告書
(公表資料)

小田深山ブナ（遺伝資源）希少個体群保護林
千本山天然ヤナセスギ（遺伝資源）希少個体群保護林
千本山人工ヤナセスギ・ヒノキ希少個体群保護林
雁巻山ヤナセスギ（遺伝資源）希少個体群保護林
横荒山モミ・ツガ（遺伝資源）希少個体群保護林

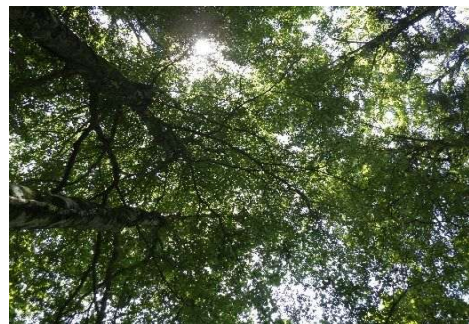
令和 8 年 3 月

四 国 森 林 管 理 局
有限会社 エー環境研究所

目次

小田深山ブナ（遺伝資源）希少個体群保護林	1
千本山天然ヤナセスギ（遺伝資源）希少個体群保護林	2
千本山人工ヤナセスギ・ヒノキ希少個体群保護林	3
雁巻山ヤナセスギ（遺伝資源）希少個体群保護林	4
横荒山モミ・ツガ（遺伝資源）希少個体群保護林	5

小田深山ブナ(遺伝資源)希少個体群保護林	
管轄森林管理局・署	四国森林管理局・安芸森林管理署
所在地	愛媛県西予市、内子町
面積	8.48ha
設定年	平成2年(平成30年変更)
保護林の概要 (設定目的)	標高は約1260～1340mに位置し、冷温帯に属する。 ブナのほか、ウラジロモミ、ツガ、コハウチワカエデ、ミズナラ、ミズメ、アカシデ等が生育している。 ブナが地域的にまとまって生育しており、保護林設定管理要領の第4の3(2)のエ「遺伝資源の保護を目的とする個体群」に該当する。 保護対象種:ブナ



モニタリング調査の概要

実施年度	令和7年度(2025年度)
調査項目	1.基礎調査 森林概況調査、資料調査、聞き取り調査 2.森林調査 森林詳細調査、実生調査、ライン高木調査、植物調査(植物リストの作成、巨木の確認) 3.哺乳類調査 センサーカメラ調査、フィールドサイン調査、巣箱かけ調査、シカの被害状況調査 4.鳥類調査 スポットセンサス、ラインセンサス
調査手法	1.基礎調査 森林概況調査として保護林内を踏査し、森林の発達段階や病虫害等の発生状況を確認する。 2.森林調査 森林詳細調査として調査プロットを3箇所設定し、樹木の胸高直径・樹高の計測、植生概要等を記録する。 実生調査として調査プロット内に5箇所調査枠を設定し、実生・萌芽の生育状況を記録する。 ライン高木調査として50mラインを設定し、樹木の胸高直径・樹高の計測、位置等を記録する。 植物調査としてプロットまでのアクセスルート上の植物リスト作成(希少種が確認された場合は位置と写真を記録)及び巨木(種名、胸高直径、位置)を記録する。 3.哺乳類調査 センサーカメラ調査として調査プロット内及び周辺に3台カメラを設置し、出没する動物種を記録する。 巣箱かけ調査として調査プロット内に1台巣箱を設置し、動物種(ヤマネ・モモンガ)の利用状況を確認する。 シカの被害状況調査として踏査ルート上の樹皮剥ぎ状況を確認し、被害木の胸高直径・樹高の計測、被害状況等を記録する。 4.鳥類調査 ラインセンサスコース上に5箇所程度のスポットを設けた。各スポットにおいて半径50mの範囲を20分間調査し、確認できた鳥類を記録する。
結果概要	・森林タイプは天然生林が維持されていた。 ・ブナが優占、ウラジロモミやミズナラなどが混生。ブナは小径木から大径木まで連続的に分布、小径木は多い。ブナの実生は僅か。大部分では、H27と比較して、プロット内の胸高断面積合計の増加がみられたほか、構成樹種に大きな変化はなく、生育する樹木は穏やかに成長しており、安定した森林の状態を維持している。プロット4では、大径木のブナの枯死がみられたが、森林遷移の過程と考えられる。 ・低木層(0.8～2.0m未満)の植被率は0～20%、草本層(0.8m未満)の植被率は60～95%。H27以前から、林床の大部分がミヤマクマザサに覆われている。ニホンジカの痕跡は少なく、下層植生へのニホンジカの食害の影響はほとんどないと考えられた。 草本層の植被率はR2と比較して低下(R2草本層1～20%)していた。R2は不嗜好性植物(コバノイシガケマ)の繁茂を確認、R7も不嗜好性植物(イワヒメワラビやツルシキミ等)が目立つ箇所が点在。下層植生は、継続してニホンジカによる食害の影響を受けていると考えられた。 ・ニホンジカの痕跡(糞、剥皮)は僅かにみられる程度で、下層植生(ササ等)は豊かに生育している状況から、ニホンジカによる被害レベルは1と判定された。 ・哺乳類が12科20種(H27は6科8種)、鳥類が11科16種(H27はセンサーカメラで2科2種)確認され、そのうち希少種は10種(ニホンモモンガ、ヤマネ、ハイタカなど)(H27は希少種の記載なし)であった。 希少性の高い動物を含む、多様な森林性の動物の生息地としての機能を継続して発揮していると考えられる。 【確認された影響:ア野生鳥獣、イ病虫害、②外来種、エ温暖化、オ自然撓乱、カその他】 H27年度調査と比べブナの生育状況に大きな変化はなく、安定した森林を維持。 R7年度調査においてブナの一部は大径木が枯死、今後のブナの個体群動態に留意。 H27年度委員会において、「愛媛県内でニホンジカの分布が広がり、密度も高くなってきている地域が多いので、注意しておく必要」との意見があった。 ブナ個体群の動態やシカ被害状況については、今後もモニタリング調査により継続的に確認。

千本山天然ヤナセスギ(遺伝資源)希少個体群保護林	
管轄森林管理局・署	四国森林管理局・安芸森林管理署
所在地	高知県馬路村
面積	178.83ha
設定年	大正7年設定(平成30年変更)
保護林の概要 (設定目的)	標高は約540m～1,080mに位置し、暖温帯に属する。 スギのほか、ヒノキ、モミ、ツガ、ミズメ、ウラジロガシ等が生育している。 樹齢200～300年のヤナセスギが地域的にまとまって生育しており、保護林設定管理要領の第4の3(2)のエ「遺伝資源の保護を目的とする個体群」に該当する。 保護対象種:ヤナセスギ



モニタリング調査の概要

実施年度	令和7年度(2025年度)
調査項目	1.基礎調査 森林概況調査、資料調査、聞き取り調査 2.森林調査 森林詳細調査、実生調査、ライン高木調査、植物調査(植物リストの作成、巨木の確認) 3.哺乳類調査 センサーカメラ調査、フィールドサイン調査、巣箱かけ調査、シカの被害状況調査 4.鳥類調査 スポットセンサス、ラインセンサス
調査手法	1.基礎調査 森林概況調査として保護林内を踏査し、森林の発達段階や病虫害等の発生状況を確認する。 2.森林調査 森林詳細調査として調査プロットを3箇所設定し、樹木の胸高直径・樹高の計測、植生概要等を記録する。 実生調査として調査プロット内に5箇所調査枠を設定し、実生・萌芽の生育状況を確認する。 ライン高木調査として50mラインを設定し、樹木の胸高直径・樹高の計測、位置等を記録する。 植物調査としてプロットまでのアクセスルート上の植物リスト作成(希少種が確認された場合は位置と写真を記録)及び巨木(種名、胸高直径、位置)を記録する。 3.哺乳類調査 センサーカメラ調査として調査プロット内及び周辺に3台カメラを設置し、出没する動物種を確認する。 巣箱かけ調査として調査プロット内に1台巣箱を設置し、動物種(ヤマネ・モモンガ)の利用状況を確認する。 シカの被害状況調査として踏査ルート上の樹皮剥ぎ状況を確認し、被害木の胸高直径・樹高の計測、被害状況等を記録する。 4.鳥類調査 ラインセンサスコース上に5箇所程度のスポットを設けた。各スポットにおいて半径50mの範囲を20分間調査し、確認できた鳥類を記録する。
結果概要	・森林タイプは天然生林と育成天然林が維持されていた。 ・スギが優占、ヒノキ、モミ、ツガなどが混生。スギは小径木から大径木まで連続的に分布、小径木は多い。R2、R7ともにスギの実生は確認なし。R2と比較して、プロット内の胸高断面積合計の増加がみられたほか、構成樹種に大きな変化はなく、生育する樹木は穏やかに成長しており、安定した森林の状態を維持している。 ・下層植生はやや貧弱で、低木層の植被率は0～50%、草本層の植被率は1～40%。草本層はツルシキミやシキミなどが多い。草本層の植被率はR2と比較して低下(R2草本層1～60%)していた。R2は不嗜好性植物の繁茂は見られなかったが、R7は不嗜好性植物が目立つ箇所が点在。下層植生は、継続してニホンジカによる食害の影響を受けていると考えられた。 ・鳥獣害としてニホンジカによる痕跡(糞、剥皮)が見られた。ニホンジカの影響は、高木層には至っていないものの、下層植生がまばらで不嗜好性植物が目立つ箇所が点在する状況から、ニホンジカによる被害レベルは3と判定された。 ・哺乳類が12科16種(R2は10科13種)、鳥類が19科31種(R2はセンサーカメラで8科11種)確認され、そのうち希少種は10種(ニホンモモンガ、ヤマネ、ジュウイチなど)(R2は3種。ニホンモモンガ、ニホンカモシカ、コサメビタキ。)であった。 希少性の高い動物を含む、多様な森林性の動物の生息地としての機能を継続して発揮していると考えられる。 【確認された影響:①野生鳥獣、イ病虫害、②外来種、気温暖化、オ自然攪乱、カその他】 R2年度調査と比べ、ヤナセスギ、ヒノキの生育状況に大きな変化なく、成熟した森林になりつつある。 R2年度調査と比べ、草本層の植被率の低下、下層植生はシカ忌避植が目立つ箇所が確認され、ニホンジカによる食害の影響が続いている。 R2年度委員会において「ニホンジカ対策を早急に実施する必要」との意見があり、シカ捕獲対策を引き続き講じていく必要。

千本山人工ヤナセスギ・ヒノキ希少個体群保護林	
管轄森林管理局・署	四国森林管理局・安芸森林管理署
所在地	高知県馬路村
面積	23.90ha
設定年	昭和37年設定(平成30年変更)
保護林の概要 (設定目的)	標高は約540～940mに位置し、暖温帯に属する。 スギのほか、アカマツ、ウラジロガシ、モミ、ツガ等が生育している。 大正11年に植林されたスギ・ヒノキの人工林であり、保護林設定管理要領の第4の3(2)のエ「遺伝資源の保護を目的とする個体群」に該当する。 保護対象種: ヤナセスギ、ヒノキ



モニタリング調査の概要

実施年度	令和7年度(2025年度)
調査項目	1.基礎調査 森林概況調査、資料調査、聞き取り調査 2.森林調査 森林詳細調査、実生調査、植物調査(植物リストの作成、巨木の確認) 3.哺乳類調査 センサーカメラ調査、フィールドサイン調査、巣箱かけ調査、シカの被害状況調査
調査手法	1.基礎調査 森林概況調査として保護林内を踏査し、森林の発達段階や病虫害等の発生状況を確認する。 2.森林調査 森林詳細調査として調査プロットを3箇所設定し、樹木の胸高直径・樹高の計測、植生概要等を記録する。 実生調査として調査プロット内に5箇所調査枠を設定し、実生・萌芽の生育状況を記録する。 植物調査としてプロットまでのアクセスルート上の植物リスト作成(希少種が確認された場合は位置と写真を記録)及び巨木(種名、胸高直径、位置)を記録する。 3.哺乳類調査 センサーカメラ調査として調査プロット内及び周辺に3台カメラを設置し、出没する動物種を記録する。 巣箱かけ調査として調査プロット内に1台巣箱を設置し、動物種(ヤマネ・モモンガ)の利用状況を確認する。 シカの被害状況調査として踏査ルート上の樹皮剥ぎ状況を確認し、被害木の胸高直径・樹高の計測、被害状況等を記録する。
結果概要	・森林タイプは人工林が維持されていた。 ・スギとヒノキが優占、ウラジロガシやモミなどが混生。スギ、ヒノキともに直径30～60cm程の個体が多く、小径木は少ない。実生はスギ、ヒノキともに僅か。R2と比較して、プロット内の胸高断面積合計の増加がみられたほか、構成樹種に大きな変化はなく、生育する樹木は穏やかに成長している。高木個体は安定して生育しており、成熟した樹林が形成されつつある。 ・下層植生はやや貧弱で、低木層の植被率は15～60%、草本層の植被率は1～5%。低木層はアセビやシキミが多い。草本層の植被率はR2と比較して低下(R2草本層1～20%)。R2は不嗜好性植物の繁茂は見られなかったが、R7は不嗜好性植物が目立つ箇所が点在。下層植生は、継続してニホンジカによる食害の影響を受けていると考えられた。 ・鳥獣害としてニホンジカによる痕跡(糞)が見られた。ニホンジカの影響は、高木層には至っていないものの、下層植生がまばらで不嗜好性植物が目立つ箇所が点在する状況から、ニホンジカによる被害レベルは3と判定された。 ・哺乳類が10科12種(R2は7科8種)確認され、そのうち希少種はカモシカ1種(R2もカモシカ1種)であった。希少性の高い動物を含む、多様な森林性の動物の生息地としての機能を継続して発揮していると考えられる。 【確認された影響: ㊦野生鳥獣、イ病虫害、㊧外来種、エ温暖化、オ自然攪乱、カその他】 R2年度調査と比べ、ヤナセスギ、ヒノキの生育状況に大きな変化なく、成熟した森林になりつつある。 R2年度調査と比べ、草本層の植被率の低下、下層植生はシカ忌避植が目立つ箇所が確認され、ニホンジカによる食害の影響が続いている。 R2年度委員会において「ニホンジカ対策を早急に実施する必要」との意見があり、シカ捕獲対策を引き続き講じていく必要。

雁巻山ヤナセスギ(遺伝資源)希少個体群保護林	
管轄森林管理局・署	四国森林管理局・安芸森林管理署
所在地	高知県馬路村
面積	20.98ha
設定年	平成2年設定(平成30年変更)
保護林の概要 (設定目的)	標高は約650～1,100mに位置し、暖温帯に属する。 スギのほか、モミ、ツガ、ウラジロガシ、ミズメ等が生育している。 樹齢200年～300年のヤナセスギが地域的にまとまって生育しており、保護林設定管理要領の第4の3(2)のエ「遺伝資源の保護を目的とする個体群」に該当する 保護対象種:ヤナセスギ



モニタリング調査の概要

実施年度	令和7年度(2025年度)
調査項目	1.基礎調査 森林概況調査、資料調査、聞き取り調査 2.森林調査 森林詳細調査、実生調査、ライン高木調査、植物調査(植物リストの作成、巨木の確認) 3.哺乳類調査 センサーカメラ調査、フィールドサイン調査、巣箱かけ調査、シカの被害状況調査 4.鳥類調査 スポットセンサス、ラインセンサス
調査手法	1.基礎調査 森林概況調査として保護林内を踏査し、森林の発達段階や病虫害等の発生状況を確認する。 2.森林調査 森林詳細調査として調査プロットを3箇所設定し、樹木の胸高直径・樹高の計測、植生概要等を記録する。 実生調査として調査プロット内に5箇所調査枠を設定し、実生・萌芽の生育状況を記録する。 ライン高木調査として50mラインを設定し、樹木の胸高直径・樹高の計測、位置等を記録する。 植物調査としてプロットまでのアクセスルート上の植物リスト作成(希少種が確認された場合は位置と写真を記録)及び巨木(種名、胸高直径、位置)を記録する。 3.哺乳類調査 センサーカメラ調査として調査プロット内及び周辺に3台カメラを設置し、出没する動物種を記録する。 巣箱かけ調査として調査プロット内に1台巣箱を設置し、動物種(ヤマネ・モモンガ)の利用状況を確認する。 シカの被害状況調査として踏査ルート上の樹皮剥ぎ状況を確認し、被害木の胸高直径・樹高の計測、被害状況等を記録する。 4.鳥類調査 ラインセンサスコース上に5箇所程度のスポットを設けた。各スポットにおいて半径50mの範囲を20分間調査し、確認できた鳥類を記録する。
結果概要	・森林タイプは育成天然林が維持されていた。 ・スギが優占、モミ、ツガなどが混生。スギは小径木から大径木まで連続的に分布、小径木は多い。スギの実生は僅か。R2と比較して、プロット内の胸高断面積合計の増加がみられたほか、構成樹種に大きな変化はなく、生育する樹木は穏やかに成長しており、安定した森林の状態を維持している。 ・下層植生はやや貧弱で、低木層の植被率は3～50%、草本層の植被率は1～20%。全体的にアセビやツルシキミが多い。低木層の植被率はR2と比較して低下(R2低木層10～60%)していた。R2は不嗜好性植物の繁茂は見られなかったが、R7は不嗜好性植物が目立つ箇所が点在。下層植生は、継続してニホンジカによる食害の影響を受けていると考えられた。 ・鳥獣害としてニホンジカによる痕跡(糞、剥皮)が見られた。ニホンジカの影響は、高木層には至っていないものの、下層植生がまばらで不嗜好性植物が目立つ箇所が点在する状況から、ニホンジカによる被害レベルは3と判定された。 ・哺乳類が10科13種(R2は8科10種)、鳥類が18科28種(R2はセンサーカメラで6科6種)確認され、そのうち希少種は8種(ニホンモモンガ、カモシカ、クマタカなど)(R2は3種。ニホンモモンガ、ニホンカモシカ、クマタカ)であった。 希少性の高い動物を含む、多様な森林性の動物の生息地としての機能を継続して発揮していると考えられる。 【確認された影響:⑦野生鳥獣、イ病虫害、⑧外来種、気温暖化、オ自然攪乱、カその他】 R2年度調査と比べ、ヤナセスギの生育状況に大きな変化なく、安定した森林を維持している。 R2年度調査と比べ、低木層の植被率の低下、下層植生はシカ忌避植が目立つ箇所が確認され、ニホンジカによる食害の影響が続いている。 R2年度委員会において「ニホンジカ対策を早急に実施する必要」との意見があり、シカ捕獲対策を引き続き講じていく必要。

横荒山モミ・ツガ(遺伝資源)希少個体群保護林	
管轄森林管理局・署	四国森林管理局・安芸森林管理署
所在地	高知県安芸市
面積	81.20ha
設定年	大正10年設定(平成30年変更)
保護林の概要 (設定目的)	標高は約680～1230mに位置し、暖温帯に属する。 モミ、ツガのほか、スギ、ブナ、ミズメ、コハウチワカエデ、イタヤカエデ等が生育している。 モミ・ツガが地域的にまとまって生育しており、保護林設定管理要領の第4の3(2)のエ「遺伝資源の保護を目的とする個体群」に該当する。 保護対象種:モミ、ツガ



モニタリング調査の概要

実施年度	令和7年度(2025年度)
調査項目	1.基礎調査 森林概況調査、資料調査、聞き取り調査 2.森林調査 森林詳細調査、実生調査、ライン高木調査、植物調査(植物リストの作成、巨木の確認) 3.哺乳類調査 センサーカメラ調査、フィールドサイン調査、巣箱かけ調査、シカの被害状況調査 4.鳥類調査 スポットセンサス、ラインセンサス
調査手法	1.基礎調査 森林概況調査として保護林内を踏査し、森林の発達段階や病虫害等の発生状況を確認する。 2.森林調査 森林詳細調査として調査プロットを3箇所設定し、樹木の胸高直径・樹高の計測、植生概要等を記録する。 実生調査として調査プロット内に5箇所調査枠を設定し、実生・萌芽の生育状況を記録する。 ライン高木調査として50mラインを設定し、樹木の胸高直径・樹高の計測、位置等を記録する。 植物調査としてプロットまでのアクセスルート上の植物リスト作成(希少種が確認された場合は位置と写真を記録)及び巨木(種名、胸高直径、位置)を記録する。 3.哺乳類調査 センサーカメラ調査として調査プロット内及び周辺に3台カメラを設置し、出没する動物種を記録する。 巣箱かけ調査として調査プロット内に1台巣箱を設置し、動物種(ヤマネ・モモンガ)の利用状況を確認する。 シカの被害状況調査として踏査ルート上の樹皮剥ぎ状況を確認し、被害木の胸高直径・樹高の計測、被害状況等を記録する。 4.鳥類調査 ラインセンサスコース上に5箇所程度のスポットを設けた。各スポットにおいて半径50mの範囲を20分間調査し、確認できた鳥類を記録する。
結果概要	・森林タイプは天然生林が維持されていた。 ・モミ、ツガ、スギが優占し、ブナやシキミなどが混生。ツガは40～80cm程の個体が多く、小径木は断続的に分布。モミはプロット2のみに生育し、小径木はみられず40～140cmの範囲で断続的に分布。モミ、ツガの実生は僅か。R2と比較して、大部分ではプロット内の胸高断面積合計の増加がみられたほか、構成樹種に大きな変化はなく、安定した森林を維持しているが、プロット3では大径木の枯死がみられた。 ・下層植生はやや貧弱で、低木層の植被率は0～40%、草本層の植被率は1～10%。低木層、草本層ともにシキミやイヌガシなどが多い。 草本層の植被率はR2と比較して低下(R2草本層1～20%)していた。R2は不嗜好性植物(コバノイシガクマ)の繁茂を確認、R7も不嗜好性植物(イワヒメワラビやツルシキミ等)が目立つ箇所が点在。下層植生は、継続してニホンジカによる食害の影響を受けていると考えられた。 ・鳥獣害としてニホンジカによる痕跡(糞、剥皮)が見られた。ニホンジカの影響は、高木層には至っていないものの、下層植生がまばらで不嗜好性植物が目立つ箇所が点在する状況から、ニホンジカによる被害レベルは3と判定された。保護林の一部では、土壌の流出及び風倒木がみられ、プロット3は土壌流出の被害を受けていた。 ・哺乳類が12科15種(R2は10科13種)、鳥類が16科31種(R2はセンサーカメラで7科8種)確認され、そのうち希少種は10種(ニホンモモンガ、ヤマネ、ルリビタキなど)(R2は4種。ニホンモモンガ、ニホンカモシカ、ニホンツキノワグマ、アカショウビン)であった。希少性の高い動物を含む、多様な森林性の動物の生息地としての機能を継続して発揮していると考えられる。 【確認された影響:⑦野生鳥獣、⑧病虫害、⑨外来種、⑩温暖化、⑪自然攪乱、カその他】 R2年度貯砂と比べ、大部分ではモミ、ツガの生育状況に大きな変化なく、高木個体を中心に安定した森林を維持。 R2年度調査でも確認のあった土壌流出や風倒木のある箇所は、森林の動態に注意をする必要があり、ドローン撮影により状況を今後確認する。 R2年度調査と比べ、草本層の植被率の低下、下層植生はシカ忌避植が目立つ箇所が確認され、ニホンジカによる食害の影響が続いている。 R2年度委員会において「ニホンジカ対策を早急に実施する必要」との意見があり、シカ捕獲対策を引き続き講じていく必要。